

この進化は、現金の取扱や店舗の在り方、お客様との接点など伝統的で保守的な従来の金融の「かたち」を一変させることになり、今後の金融にあっても、行政と同様、あるいはそれ以上に、こうした大きな変化に機敏に対応していくことが必須になると思われます。また、貸出に際する審査にAIを活用することで、すでに効果的な業務展開を開始している事例も多くあります。現在は、従来型の審査の補完としている例や住宅ローンなど定型的な分野に限られているようですが、今後は、すべてがAIを使い、クラウド上で24時間いつでも借入も投資も完結するような時代になることでしょう。

ここで、行政と金融に共通する観点として、行政にとっての住民、金融にとってのお客様へのAIによるクライアント向け新サービスの開発と同時に求められるのが、自らの業務改革や業務改善だと思われます。両者に共通して、多種多様な紙による業務体系や印鑑の取扱、膨大なデータや個人情報の保管と活用など20世紀型業務形態の典型とも言えるものが漫然と残っています。今後は、AI時代に相応しい業務の在り方や働き方改革に対応した業務の仕組みに思い切って切り替えて行くことが必須となり、AIの活用やクラウドの利用なども含め、従来の発想に囚われない柔軟な発想で、より効率的な業務体系を構築することが求められるでしょう。

### 3. AIの進化の陰で…

一方で、AIそのものを研究しているセクターでは、このAIの進化をどこまで進めて行くのかを真剣に議論しているとの話を伺いました。

これまでのAI（人工知能）は当然のことながら、人間の知見、指示、命令に基づくAI（人工知能）であるわけですが、この人工知能が自ら、人間の監視の届かないところで、次世代のAIを考え出している可能性がないか？あるいは、今後、そういう危険性がないか？ということだそうす。人間の考える範囲のAIであれ

ば、そのシステムを統制していくことができるが、AIが作ったAIでは、その仕組みやシステムの解析さえ、人間には困難ではないかということのようです。

アポロ11号が月面に着陸し、3人の宇宙飛行士が無事、地球に帰還したのが、今からちょうど50年前の1969年です。当時、高性能なジェットエンジンや超高熱に耐える機体の開発とともに困難を極めたことの 하나가、一連の飛行に關した膨大な科学的計算であったとされ、この計算装置こそが後のスーパーコンピュータの開発のベースになったとする説があります。しかしながら、当時の計算装置は、非常に大型で計算速度も遅く、現代のそれとは全く比較にならないものでした。

ところが、それからたった50年で、わたしたち人類は、僅か縦15cm、横7cm、厚さ5mmのスマートフォンの中に、東京ドーム3つ分に当たる当時の計算装置を納めてしまったことになるそうです。この50年間の人類の英知を尽くしたその技術的な革新や特に最近の開発速度の速さには、目を見張るものがあります。そして、すでにそのスマートフォンの中に多くのAI的な技術が利用されているわけです。現代に生きる我々は、当時の東京ドーム3つ分のコンピュータを背負って生活していることになるわけです。この時、考えたいのは、この50年前の先人たちが、このことを少しでも想像出来ていたか？ということす。当時の巨大な計算装置が、たった150グラムの中に納まってしまふ神器とも思える機器（スマートフォン）のことを想像しろという方に無理があったはずす。

ところが、今、私たちは、スマートフォンを手にし、毎日、インターネットに触れ、その利便性を謳歌しています。とすると、すでにスマートフォンを、ICTを、AIを手にした私たちに訪れるこれから20年、経験する30年、あるいは50年、いったいどんな進化があるのか？何が起きるのか？私たちの想像を遥かに超えていくということだけは、間違いなさそうです。否応なしに技術は進歩し、人々の生活スタイルを変

え、社会の在り方さえも一変させて行くかもしれません。従って、この劇的な変化の中では、変化に柔軟に対応し、適応していくことや、上手く使いこなし、工夫して利用していくことこそが必要だと思われまます。

また、こうしたAIの進展についてEU（欧州連合）では、2018年度末までに、AIの倫理指針を策定する方向にあります。EUが実施した有識者会議（AIフォー・ピープル）で、AIの判断過程を分かりやすく説明させることを企業に義務づけることや、AIの透明性などを監視する機関を設置したり、その倫理性を認証する制度を創設したりするといった、新たなAI分野のルールを検討しています。

#### 4. 行政と金融の連携

やや論点が大きくなってしまいましたが、様々な問題を克服しながらも、ICT、IoT、AIといった21世紀の技術が今後、急速に普及し、活用されて行くことは間違いありません。

これからの人口減少社会、グローバル社会は、誰一人経験したことの無い未知の世界です。過去の経験や知識が、そのままではいかせない時代が到来するとも考えられます。20世紀を生きてきた私たちの想像を遥かに超える、未曾有の状況を市民や地域社会が経験していくわけです。その中で私たちは、行政サービスを後退させることや金融機能を劣化させることなく、期待に応え、地域を、社会を支え続け、持続可能な地域や社会を実現しなければなりません。

この時、予想のつかない未来を想像し、これまでの経験では導き出せなかったソリューションを生み出し、効果的で持続性のある行政や金融を実現する有効な手段、手立てこそがAIなのではないでしょうか？

行政も信用金庫のような地域金融も地域を持続的に発展させていくことが、厳しい環境が予想される21世紀にあって、共通の課題であり、目的でもあります。ついては、これまで以上に協調、協力関係を築くことで、双方に不足するところは互いに補い合いながら、良いところは

刺激し合いながら、目前に迫った大変革の時代の到来に備えた地域社会や行政、金融の未来の「かたち」造りに果敢に取り組んで参りたいと思います。

そういう意味からも公益財団法人東京市町村自治調査会が「基礎自治体におけるAI・RPA活用に関する調査研究」を平成30年度調査研究テーマに取り上げられたことは、今後、各所での施策研究・立案・施行に大いに役立つものと思います。